

「長浜」生き物好きの聖地化プロジェクト

～オンラインでみんなの心を長浜に～



生き物好きよ！長浜に集まれ！

離れていてもオンラインならつながれる



生き物とオンラインの力で
みんな笑顔に



大西 寅ノ介(おおにし とうらのすけ)
愛媛県立長浜高等学校 1年

中西 煌星(なかにし こうせい)
愛媛県立長浜高等学校 1年

池本 新(いけもと あらた)
愛媛県立長浜高等学校 1年

安田 彩人(やすだ あやと)
愛媛県立長浜高等学校 1年

活動概要

活動の内容

- ① 長浜高校に興味がある中学生を対象に「生き物好き中高生コミュニティ作りのためのオンラインイベント」(計6回)
 - ・イベント内容:好きな生き物を語る座談会、生き物クイズ大会、チーム対抗水槽コンテスト、海に関する夢を語る座談会など
- ② 長高水族館に来館できない事情のある方を対象に「オンライン個別水族館公開」(計6回)
 - ・内容:クイズを交えた生き物解説付き水族館ガイドツアー
 - ・参加者:脳性麻痺等で寝たきりの県外の特別支援学校生、愛知県の生き物大好き小学生、東京都の高校生と先生、海洋教育支援団体の関係者など

活動の特徴(新規性・発展性)

- ・オンラインのため参加制限が少なく、コストも低いので参加が容易
- ・高校生主催のため、若い年代が参加しやすく、若年層のコミュニティが形成されやすい
- ・個別公開は実施コストが大きいと、営利目的ではなく、高校生が運営する水族館ならではのイベントである
- ・SDGs「質の高い教育をみんなに」「海の豊かさを守ろう」にもつながる
- ・コロナにより、オンラインイベントが一般化した今だからこそ、実施できるイベントである

活動の成果

- ・イベント:計6回実施し、延68名の参加があった。複数回イベントに参加した人が17名、全イベントに参加した人もいた。徐々に顔と名前が一致する人も増え、生き物好きの若年層が集まる場として定着した。アンケート結果も参加者の満足度の高さを表していた。
- ・個別公開:1ヶ月で5組の申込みと需要が高く、それに応えることができた。長文のお礼の手紙が複数届いたり、マスコミの取材を受けたりなど、想像以上の反響があった。

課題の設定と意図

住民への地域課題の聞き取りで「人口と若い世代の減少による活気の低下」が挙げられた。私たちは、その解決のため「関係人口の増加をもたらす長浜のブランド化の促進」という方法を考えて。秋葉原にアニメや家電好きが集まるように、ある分野の聖地は、同じ興味を持った人が集まる強い動機付けになり、関係人口の増加につながる。近年、長浜高校には、全国から生き物好きの高校生が入学している。また、高校内にある長高水族館は、開館25年目を迎え、これまで述べ10万人以上に海洋教育の場を提供してきた。こうした長年の活動により、長浜の町は「生き物好きが集まる町」「海洋教育の拠点」というブランド化が進んできている。そこで、現在長浜高校や長高水族館が取りこぼしている人達のニーズに応えることで、さらなるブランド化の促進と定着を図れると考え、以下の取りこぼしている人に焦点を当て、活動を行った。

① 県外への進学は非常にハードルが高く、長浜高校への入学が叶わない人

② 予約枠がすぐ埋まる、来館のためにかかる時間や費用も大きい、健康上の理由で外出が困難であるなど様々な事情で、長高水族館に行くことが叶わない人

課題解決のための仮説と計画

1つ目の「県外進学が困難な中学生」のニーズに応える活動として、生き物好きの中高生オンラインコミュニティ作りに取り組んだ。その理由としては、生き物好き同士が安定して交流する場を提供できれば、入学が叶わなくても少なからず満足感を提供できると考えたからだ。コミュニティの形成には、気軽に参加でき、定期的に交流できる場が必要であるため、月に一度、オンラインイベントを開催した。いきなり大規模のコミュニティ作りは難しいため、対象を長浜高校への入学検討者に絞り、コミュニティの土台形成を目標とした。特に県外からの入学希望者は、学校説明会もZoomを用いて実施するため、オンラインイベントへの抵抗も少なく、初期段階の対象として最適であると考えた。イベントの告知は、県外への進学を希望する中学生が集まるプラットフォーム「地域みらい留学」のHPへの情報掲載や、オンライン学校説明会に参加した中学生へのメールによって行った。活動成果の評価を数値化するためのアンケートを実施すると共に、継続して参加した中学生の増減や参加者同士の認知の進行度によってコミュニティ形成の進捗状況を測った。

2つ目の「様々な事情で来館が難しい人」のニーズに応える活動として、オンラインでの個別水族館公開を実施した。唯一の応募条件を、「長高水族館に一度も来たことがない」とした。実施可能な日程は、平日の放課後と土曜日の午前中とし、申込後に先方の都合に合わせて、個別に日程調整を行った。多数を相手に同時に配信をするのではなく、ビデオ通話を用いて1対1で水族館ガイドツアーを実施することで、より深いコミュニケーションとなり、テレビ放映やYouTubeなどの動画配信との差別化を図った。この活動は、大きなコストを払えない一般的な営利目的の水族館や、オンラインのノウハウがなかったコロナ前の長高水族館では実施が難しく、現在の我々にしかできない取組だと考えた。

活動で工夫できたこと

① オンラインイベント

- ・中高生の部活動などの生活リズムを考慮し、参加しやすい休日の夜に開催した。
- ・コミュニティの形成には、参加者が「自身の存在感」や「参加意義」を実感してもらう必要がある。集団の人数が多いと発言の機会が減り、コミュニケーションの濃度が下がる。オンラインでは、その傾向がより顕著であるため、ブレイクアウトルームなどの機能を使用し、少人数で交流できる場を提供するよう努めた。
- ・クイズ大会では、エンタメ性を高めながら、オンライン上での早押し判定や正誤確認の効率化などの、運営上の課題を解決するために「kahoot!」というオンラインクイズサービスを利用した。
- ・チーム対抗の水槽コンテストでは、時間内に終わらせることや、水槽作りにおける参加者の自由度を担保することを意識して、事前準備を行った。
- ・11月のイベントでは、海に関するプレゼンテーションを行う全国大会で出会った栃木県の高校生にもゲストとして参加してもらい、コミュニティの輪をより広げることができた。

② オンライン個別水族館公開

1対1での実施だからこそできる内容を心掛け、一方的な情報提供ではなく、双方向でのコミュニケーションにすることや緩きもあるアットホームな雰囲気作りを意識した。加えて、相手に合わせてより満足度が高まる内容になるよう工夫した。特別支援学校生には、言葉でのリアクションが難しいとのことだったので、3択形式のクイズを作成し、生徒さんの表情や手足の動きのリアクションを基にコミュニケーションを図った。また、生き物好きの小学生には、海洋生物に関する基本的な知識を持っていたため、少し踏み込んだマニアックな内容も盛り込むなど、解説の内容を変更した。東京都の高校生と先生、海洋教育支援団体の方には本校の水族館部としての活動内容にも興味を持たれているようだったので、普段の部活動の活動内容や水族館の運営方法についても説明した。



オンライン交流イベントの様子

大西 寅ノ介

この実践活動を通してたくさんのごことを学ぶことができました。中でもこれから大事にしていきたいことが3つある。

1つ目は、イベントを通じて広がった視野だ。最初イベントはただ参加者に楽しんでもらえればいいと思っていたが大きな間違いだった。確かに楽しんでもらうことは重要だが、それだけでは地域の課題の解決にはならない。課題の解決には、解決につながる目的を決め、それを達成できるように逆説的にイベントの考案をすすめ、参加者に自分たちがイベントを通して伝えていことが伝わるかを考えなければならない。このことは自分にとって新鮮かつ難しく、苦しいものだった。イベントの目的よりもイベント案を重視してしまい、かみ合わないことが多々あり、目的が決まっても参加者が楽しめ、伝えたいことが伝わるイベント案が出てこないこともあった。しかし回数を重ねるごとに参加者の受け取り方や目的にイベントがあっているか考えられるようになっていった。この参加者の立場や目的から解決策を逆説的に考えられる視野は今後大きなことに挑み、課題を解決するときにはなくてはならない力だと感じた。

大事にしていきたいことの2つ目は、海洋教育には高い需要があると学んだことだ。私は将来海洋関係の職業に就きたいと考えていたが、年々深刻化する環境問題や若者の海難離れに不安になっていた。しかし、この実践活動を通して海について興味を持っている人がたくさんいることを知り、地域の課題の解決の主軸になることができる海という存在のさらなる可能性を感じることができた。

3つ目はオンラインの可能性だ。オンラインイベントでは想像以上の多くの方とつながりを持つことができた。人と繋がることができれば交流を楽しむだけでなく、お互いを高め合い、さらに大きなことを成し遂げることができると思う。オンラインは場所に関係なくつながりを持つため、距離などの障壁を越えて人と人との可能性を広げてくれるのではないだろうか。また、個別水族館紹介ではオンラインだからこそ、様々な事情を抱える全国各地の人たちに海・魚の魅力を伝えることができ、良い経験を提供できたのではないかと感じた。愛知県から参加した小学生の親御様からは「小学生のうちに高校生の自分を思い描く機会はほとんどないかと思いますが、今回、生物好きの息子にとっては数年後の自分を明確なイメージとして持つことができたようで、本当に貴重な機会でした。苦手な算数にも長浜高校に入るために勉強する！とやる気になっています。」という感想をいただくことができた。このようなご感想はとても励みになり、オンラインを通じて人と関わることの暖かさを感じた。また、参加者の皆さんは本当に楽しそうに生き物の解説を聞いてくださり、積極的に質問もしてくださるので、自分たちもこの活動にやりがいを持って楽しく行うことができた。

苦しいこともあったオンラインイベントだったがやってよかったと自信をもって言うことができる。オンラインイベントは参加のハードルだけでなく、開催のハードルも低いと感じた。これからは自分たちでオンラインイベントを開催するだけでなく、自分たちも参加者になったり、オフラインイベントにも挑戦したりしてみたい。人と関わることは社会と関わることだと思う。オンラインではより多くの人と関わることができる。オンラインを通じて社会により良い大きな影響を与えることができるのではないかと考えた。オンラインでのイベントなどは、これからどんどん社会に普及していくと思う。そんな時、今回の経験を活かし、より多くの人により良いつながりを提供できるような人生を歩んでいきたい。

中西 煌星

私たちは「長浜を生き物好きの聖地にする」という目標を掲げ、その一環としてオンラインイベントを開催してきた。初めてのオンラインイベントでは、参加者との対話が初めてできこちなく、質問に対する回答が精一杯だった。しかし、経験を積むごとにコミュニケーションがスムーズになり、自身の成長を実感することができた。毎月の企画会議では参加者を引き寄せるアイデアを出し合い、活発な意見交換で班の一体感が育まれる時間となり、とても楽しい時間だった。

様々なイベントを実施してきた中で、それぞれに学びと思い出がある。中でも印象深いのはオンラインクイズ大会で、全国から参加した中学生と水族館部員が熱戦を繰り広げ、クイズの楽しさを共有できたことは非常に嬉しかった。また、全国の人たちと自宅に居ながらクイズ大会ができるのは、オンラインならではの改めて実感できた。また、長浜高校の特色であるマリンアクアリウム授業を取り入れた、チーム対抗の水槽コンテストでは、当初オンラインでの実施は難しい内容だと感じていた。しかし、入念なシミュレーションと生き物好きならではの活発な意見交換でスムーズにイベントが進み、世界に一つだけの素晴らしい水槽を完成させることができた。イベントの回数を重ねるごとに新しい参加者が増え、毎回来てくださる方も出てくるなど、コミュニティの広がりと安定化を感じました。

また、11月に実施した「自分の海の夢を考えよう、共有しよう」のイベントでは、ゲストとして海なし県である栃木県から、海が大好きな高校生3人が参加してくれ、コミュニティの輪を広げることができた。アクシデントもなくスムーズに進行し、それぞれの海に関する夢には様々な明るい未来が詰まっており、とても充実したイベントになった。

私たちは、オンライン個別水族館公開も積極的にに行った。これは、脳性麻痺などの健康上の理由など様々な理由で来館が難しい方々に、ZOOMで水族館ガイドツアーを実施し、海や生き物との触れ合いを楽しんでいただくイベントである。特に印象に残っているのが、自宅で寝たきりのしょうちゃん(仮名)という方である。言葉を話すことは難しいですが、表情や手足の動きで精一杯アクションをしながら参加してくださり、イベント終了後には、特別支援学校の先生と一緒に感想のお手紙まで送ってくれました。お手紙には、私が担当しているミズカマキリが見られてうれしかったことや、イベント終了後にクイズで出題したミズカマキリが飛び画像を検索して見たことなどが書かれており、しょうちゃんがイベントを楽しんでくれたことがとてもよく伝わってきて、本当にうれしかったです。また、お母様からは、「このような取り組みがもっと増えて、出かけられない子供達が自宅にいながら楽しめるようになって欲しい。今まで、色々なことをあきらめてきたがあきらめなくてもいいんだと希望が持てた。長浜高校の生徒さんがその機会を作ってくれて、感謝しかない。」というお言葉をいただき、自分たちの活動が予想以上に役に立つことができていることを実感し、大きな励みとなった。

今後は、コミュニティの拡大と持続可能な形の模索を進めたいと思う。また、個別の水族館公開は期間限定イベントとして定期的を実施していくことで、より多くの方に海や生き物に触れる海洋教育の場を提供できたらと考えている。先輩方が長年続けてきた長浜での活動に、我々の活動を積み上げることで、この町に生き物好きが集まり、関わろうとする人が増える未来につなげていきたい。

池本 新

私は、実践活動としてオンラインでの活動を行った。副題にもあるように、オンラインの特性をうまく利用して、全国各地の人と交流を持ち、実際に長浜に来ることは叶わなくても、心だけでも長浜に来てもらった気持ちになってもらうことを意識した。特に海や生き物に興味がある人を対象としたので、その人たちの満足度が高くなるように心がけた。

私たちの活動は、OR合宿、オンラインイベントの実施、個別水族館公開の大きく3つに分けることができる。それぞれの活動で深い学びがあった。

まず、OR合宿では、活動計画・実践と中間発表が実施された。話し合いからスライド制作などの発表準備まで上手く役割分担と協力をしながら進めることができた。また、愛媛大学の前田先生から専門家の視点でのアドバイスをいただき、大変勉強になった。自分たちの視点だけでは気づかないことが多いことに気づき、多角的に物事を考えたり、様々な立場の人にアドバイスを求めることが重要であると学ぶことができた。2つ目のオンラインイベントでは、OR合宿で学んだことも生かしながら、参加者の視点にも立ってイベントの企画をし、満足度の高いイベントを実施することができた。回数を重ねるごとに自分が成長していることも実感でき、前回学んだことを次に生かしながら実践を重ねることを意識することで、一回一回で吸収できることが格段に増えるということも学ぶことができた。

3つ目のオンライン水族館個別公開では、個別に手厚く対応できることもあり、「すぐわかりやすく解説してくれる」「すごく楽しかった」といった感想が多く、非常に嬉しく、同時に次のイベントへのモチベーションにもなった。特に県外の特別支援学校の寝たきりで外出が難しい生徒さんからいただいたお手紙は、言葉は話せないが、学校の先生の問いかけに対して手や口を動かすことで意思疎通を図りながら書いていただいていた。内容もさることながら、それだけの時間と労力をかけてお手紙を書いてくださったことに、心が温かくなり、心が通じ合うような感覚を覚えた。オンラインであれど、お互いを想う気持ちを持ったコミュニケーションがあれば、人と人とつながれるということを実感することができた。

今後の展望としては、これまでの活動を継続しつつ、仲間と協力して新しいアイデアを形にしていきたい。具体的な内容については、これから班員と相談しながら決定したいと思

うが、これまでの活動と同じように、長高水族館だからこそ、我々だからこそできる活動にしていきたい。プライバシーなどの問題をクリアしないといけないが、一つの水槽を24時間ライブ配信をして、普段は見られない生き物の様子を見せるなども検討していきたい。

最後に、この活動を通じて得た最も大きな学びとして、仲間の大切さの再認識がありました。もちろんこれまでも協力することや仲間の存在の重要性は様々な場面で感じてきました。しかし、今回の人と人とのつながりを作っていくことを目指した活動に取り組み、その難しさや同じ趣味や温度感を持った仲間とのつながりの尊さを感じる中で、今まで以上に仲間の存在の重要性を実感しました。この活動が終わった後も、オンラインまたはオフラインにおいて、多くの人々と交流し、様々な世界を知り、より良い人生を過ごしていきたい。そして、そのつながりの先に、長浜が生き物好きがつながる場所となり、活気あふれる街になる未来があると考える。

安田 彩人

高校に入学してからの学校生活は楽しく、長浜高校が素晴らしい場所だと感じ、さらに多くの人をこの学校に呼び込みたいと思っていた時、ちょうどこの実践活動の話が入ってきた。長浜高校では、総合的な探究の時間にこの実践活動を取り入れて実施しており、個々のグループが協力してさまざまな課題に取り組むことで地域の活性化を目指している。私は、自分がしたいと思っていた長浜地域に人を呼び込むことが目的となっている、本実践活動のメンバーに加わり、オンラインを活用した水族館公開やイベントをすることにした。私は班員の中で唯一、水族館部ではないため、最初は期待と不安があったが、班員たちと共に活動する中で不安は解消された。班員の仲間は、生き物の知識が乏しく、話すのが苦手な私に配慮し、裏方としてチャットで情報提供をしたり、イベントの様子を写真などで記録したりする役割を任せてくれた。私はパソコンを使うのが得意なので、オンラインイベントの裏方業務は得意分野であり、自信を持って取り組むことができた。チームで何かに取り組む際に、適切な役割分担を行うことで、全員が自信を持って取り組む環境を作れるということを学ぶことができた。また、作戦会議や月に1回のイベントは楽しく、学校でのオンライン水槽作り体験や座談会中のハプニングなどもあったが、笑いの絶えない活動だったように感じる。時折、夜の時間帯に生徒だけでLINE通話を活用して、今後の活動についての相談や会議を行うこともあった。部活や勉強で忙しい中、都合を合わせて集まるのは難しかったが、みんなのモチベーションが高かったからこそ、継続して行うことができたと感じる。自分たちの好きなことや得意なことを生かしていたことが、全員のモチベーションを高く保てたポイントだったのではないかと思う。

座談会やクイズ大会では、水族館部の先輩や同学年の人に協力してもらいながら、工夫を凝らして活動した。特にイベント参加者が多い時には、私たちだけでは参加者の満足度を保つことが難しい状況だったので、大変助かった。状況に応じて助けを求め、自分たちでできないことは、できる人や協力してもらえる人を頼ることも重要であると実感した。

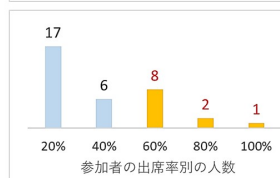
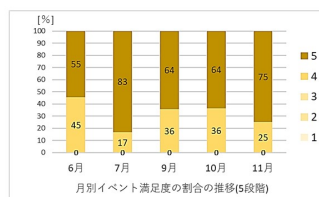
今後の活動については、2つ考えていることがある。1つ目は、まだ知られていない長浜地域の魅力を伝えるイベントを実施することだ。私も長浜高校に入学して初めて知ったが、長浜の町には長浜高校生であれば全員が、割引などのサービスが受けられる店舗が40以上ある。集まる入口は生き物や海であっても、イベントの中でこのような街の魅力を伝えていくことで、長浜に関わる人や理由を増やすことができるのではないかと考えた。2つ目は、他の班の活動とコラボすることである。長浜高校の1年生は、私たちの班以外にも、「しぐれ」と呼ばれる和菓子を生生物の形にすることで付加価値を付ける「キモカワしぐれで町おこし！」という活動や、駅の座布団を生き物のクッションに変え、座布団水族館として町を盛り上げる活動に取り組んでいる。それらの班と共同でイベントを開催することで、相乗効果が生まれ、地域の課題解決がより前に進むのではないかと考える。

私たちの活動が誰にどのような形で届き、どんな影響が出るのか、そして私たちの活動が地域の課題という大きな壁を超える一助になっているのかは、まだ明確には分からない。それでも、私たちの小さな一歩が、将来の大きな一歩につながっていると信じ、誇りを持って活動を続けていきたい。



オンライン個別水族公開の様子

放送されたニュース番組の様子



- ・計34名が全国14都府県から参加
- ・5回の県外生向けイベントの満足度は、全てのイベントで参加者全員が5段階中4以上の評価
- ・34名中11名が半分以上の出席率となり、顔なじみも増え、コミュニティの形成がなされ始めている

1. 地域探究アワードエントリー情報

エントリー希望	有	エントリー単位	グループ	ブロック	四国
---------	---	---------	------	------	----

2. オリエンテーション合宿及び実践活動の基本情報

合宿実施先	国立大洲青少年交流の家	修了日	2023/7/28	カリキュラムのタイプ	B
フィールドワークの内容					
実践活動期間	2023/7/29 ~ 2023/11/30				
活動のタイプ	新たな活動				
協力者	主な協力者			協力内容	
	所属	栃木県の高校		オンラインイベントでのゲスト出演	
	氏名	栃木県の高校生(3人)			
	所属	愛媛県立長浜高等学校		オンラインイベントでのゲスト出演	
	氏名	水族館部の部員(32人)			
	所属	愛媛大学		地域探究活動のアドバイス	
氏名	前田先生				
協力者総数	35名		協力団体数	1団体	

3. 実践活動の記録

(1)総活動日数 全 56 日

事前:準備・打合せ	42日	本番:メインの活動	9日	事後:ふりかえり・報告	5日
-----------	-----	-----------	----	-------------	----

(2)活動成果の発信等

媒体	方法	回数	概要・備考
SNS	自ら発信	3回以上	Instagramでオンライン水族館紹介の宣伝、地域みらい留学でオンラインイベントの宣伝
テレビ	取材された	1回	愛媛朝日テレビさんのニュースで取り上げていただいた。
その他	取材された	1回	大洲市の広報に掲載していただいた。

(3)主な活動記録

活動日時	区分	活動場所	活動内容
7/30 ~ 11/25	①事前学習・打合せ等	自宅から通話・愛媛県立長浜高等学校	毎月のオンラインイベントやオンライン水族館紹介の準備
8/26 ~ 11/18	②実践活動本番	自宅からZOOMで実施	長浜高校・海ついでオンラインイベントを実施計4回
7/31 ~ 11/25	②実践活動本番	愛媛県立長浜高等学校	長高水族館に来るのが難しい方向けにZOOMを用いてオンライン水族館紹介を実施 計6回
8/1 ~ 11/25	③事後打合せ・報告会等	自宅から通話	各イベント・水族館紹介の反省、報告